

弥々令和の時代に入ります。万葉集の歌を参考にして決められたそうです。学生時代に意味も分からず只覚えさせられた歌。万葉集の中に柿本朝臣人麿が作った「春過ぎて夏来るらし白妙の衣乾したり天の香久山（春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香來山）」を時節柄思い出しました。近江の荒れた都を通る時に詠んだとありました。令和も平和な年月で在りますよう御祈念申し上げます。

前にも書きましたが「衆生佛を礼すれば、佛これを見たもう、衆生佛を称えれば、佛これを聞きたもう、衆生佛を念ずれば、佛も衆生を念じたもう。かるが故に阿弥陀仏の三業と行者の三業とかれこれ一つになりて、佛も衆生も親子の如くなる故に親縁と名づく」と。三業は先月号で説明しました。念仏一会、光明会をお開きに成られた、山崎（佛陀）辨榮上人の今年百回忌を向えます。辨榮上人の發願文に「我らも完徳の鑑たる世尊に倣いて如何なる境遇にも姿色を換へざることを誓い奉る願わくは常に慈悲 歡喜 正義 安忍 剛毅 貞操 謙遜 眞實等の徳を體し 外は怨親平等に同體大悲の愛を以て佗に待し得られるように恩寵をたれ給へ」と念の言葉を提唱されました。又、辨榮上人は阿弥陀經に説かれた極樂の様子を「聖き啓示を被りて三摩耶の窓を開くれば 清きみ天は朗らかに常世のみ國現はれぬ 雲に聳ゆる高樓は 金 銀 摩尼真珠 琉璃宝石の莊嚴の 照り輝くこと窮みなく七つの寶の池見れば 八つの功徳の水満てり 金の沙はきら、かに 清める面にぞ照り徹る・・・云々」と説きました。死した後、こういう景色の場所に生まれ変われば極樂に往生できたことになります。

夏目漱石は「人を屈せんと欲せば先づ自ら屈せよ、人を殺さんと欲せば、先づ自ら死すべし」と、この思想があれば虐めは起きません。自分に痛みが解らないから起きる問題だと思えます。自己主張盛んなる時代に考えさせられる言葉です。我が身・我が事ばかりを可愛がり、他を思いやることのできない人には成りたくないものです。天台宗座主であられた故山田恵諦上人が好んで使われた「忘己利他」の仏教思想を教育に活かすべきだと思えます。何が美しい姿にさせるのか、和合調和の無いところに共生はできません。人生の積み重ねは化粧も及ばないものです。子に見せるか親の姿、心鏡を見て驚く事なかれ。この世は四苦八苦、苦しみがあるから助け合いも生じます。骨肉の争い、遺産相続でもめ、欲しいものが手に入らず、八つ当たりをする子等、昔も今も嫁姑の関係等、挙げば枚挙に遑がありません。お釈迦様は「山川草木悉有仏性」と申されました。人間として仏性を頂けたと言うことは全く稀有な事です。と言いますのも、森羅万象、何に生を受けるのか分からないのです。動物でも足の無いものからムカデのように足ばかりのもの、人間は立って二足で歩けます。人間として生まれるにも何十億の中から選ばれた、父母からしか出生することができ無いのです。何処に生まれるのか本人は知り得ることはできません。生れ出づる因縁は佛のみが知り得る事です。お釈迦様の説法の中にも「また七法あり、法を増長して損耗あること無からしむ。」と、「佛法僧から始まり六つ目に、父母に敬順するなり」とある。真に人として人生を歩めることには報恩感謝しかありません。之故、命に尊嚴が生じるのではなからうか。『六月は十六日より二十七日にかけて、「三業の清浄」をテーマに四国霊場を巡錫いたします。住職不在となりますが、その間は副住職が法務を遂行いたします。宜しくお願い申し上げます。』

令和元年五月一日

善壽寺善入院油掛地藏尊